

歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授・
経済評論家

岡田 晃

第四十九回

地政学リスクに対応、オンリーワンめざした聖徳太子

揺れ動く東アジア情勢 隋の冊封体制に入らず

「日出ずる処の天子 書を日没する処の天子に致す 恙無きや」——六〇七年に遣隋使・小野妹子が携えた国書のこの書き出しは、あまりにも有名な。当時の日本（倭国）は推古天皇の下で、甥の聖徳太子（以下、太子と表記）が新しい国造りに力を注いでいた。この国書からは、そうした太子のある意図が読みとれる。詳しく見てみよう。

その少し前の五八九年に隋が中国を統一し、実質的に約四百年ぶりに強大な統一国家が成立。これを機に東アジア情勢は大きく揺れ動いていく。

隋は周辺諸国への圧迫を強め、朝鮮半島の高句麗、百濟、新羅の三国をはじめ、北方や西域などの周辺諸国は続々と隋に朝貢し臣従した。

古くから、中国の周辺諸国や諸民族の長は中国の都に使者を送って貢物を差し出し、それを以つ

て中国皇帝から「王」に任じてもらっていた。これを冊封体制という。

しかし、ほどなく隋と高句麗の関係が悪化し、隋は四度にわたって高句麗を侵攻する。

一方、日本は新羅との対立が続いていた。実際、朝鮮半島に派兵し新羅を攻めたこともある。だが新羅はすでに隋から冊封を受けており、その新羅と戦い続けることは「隋への反乱」とみなされる恐れがあった。このように東アジア情勢は緊迫、今で言う地政学リスクが高まっていたのである。

推古天皇が即位したのは、そのような時期だった（五九三年）。太子が事実上の皇太子として政治の中心を担うようになったわけだが、隋との外交関係の構築が急務となっていた。そこで、妹子に例の国書を持たせて隋に派遣したのであった。

その文面は冒頭のとおりで、「対等な関係」を表現している。一般には「日出ずる処」と「日没する処」の表現が注目されているが、これは最も東と西の方角を表す仏教用語だという。最も

重要なポイントは「天子」という言葉にある。

中国では、「天子」とは中国皇帝のことに他ならない。したがって「日出ずる処の天子」と書いたことは、日本が隋の冊封体制に入らないとの意思を示したことになる。実際には「格下」だが、それでも隋に従属するのではなく、他の周辺諸国とは異なる独自の立場を目指していたのだ。

隋も認めた日本の立場 「オンリーワン外交」貫く

だがこれは大きな賭けでもあった。下手をすれば、隋の怒りを買って高句麗のように攻められるリスクもあった。実際、時の皇帝・煬帝はこの国書を読んで怒り「無礼な国書は今後自分に見せるな」と部下に指示したという。

それでも煬帝は返書をしたため、答礼の使者を日本に派遣、妹子も一緒に帰国した。この返書は、妹子が「帰路の百濟で紛失した」と天皇に報告したとされるなど不透明さはあるものの、隋は日本



の立場をある程度認めて外交関係を結んだのだ。
この背景には、隋にとっては高句麗の背後に位置する日本と誼を通じるメリットがあったとの見方もある。太子がそこまで読んでいたとすれば、相当したたかな外交政策だったことになる。外交で、オンリーワンの立場を示したと言える。
その後の日本の歴史を見ると、中国との外交関係は近代に至るまで大筋では太子の敷いた路線に沿ったものとなった（十五世紀初頭に足利義満が「日本国王」の称号を明の皇帝から授与され朝貢貿易を行った例はあるが）。

仏教や「和」を政治の基本に 後世の日本にも大きな影響

一方、太子はすでに内政でも新しい政策を次々に打ち出していた。

まず取り組んだのが、仏教を基本とする国造り

だ。難波（現在の大阪市）に四天王寺を建立（五九三年）したのに続き、六〇一年には斑鳩宮を造営、六〇七年頃に法隆寺を建立している。

なお現存する法隆寺が創建当時のものかどうかをめぐり、論争が明治以来続いていたが、昭和の発掘調査によって、八世紀初めに再建されたものであることが明らかとなった。それでも世界最古の木造建築であることに変わりはなく、現在、世界遺産となっていることは周知のとおりだ。

話を本題に戻そう。こうして太子は仏教を深く信仰すると同時に、仏教の思想を政治の柱に据えていった。その代表例が十七条憲法の制定だ。太子が自ら起草したと伝えられており、第一条が有名な「和を以て貴しと為し……」だ。

他の条文でも、「多くの人々の意見を尊重せよ」（第十条）、「多くの人と議論すべき」（第十七条）など、「和」の重要性を繰り返し説いている。

このような「和」を重視する考え方は、今日まで受け継がれているといっても過言ではなく、日本的な気風という価値観の起源となっている。

また第二条では「篤く三宝（仏教の教え）を敬え」と説いている。全体として仏教とともに儒教や法家（法治主義による政治を主張する思想）の考え方がミックスされており、新しい国造りの政治理念、貴族や役人に対する政治的・道徳的な訓示といった内容となっている。

仏教や儒教なども中国大陆から導入したものだ。太子はそれを日本独自のやり方で具体化し広めていった。これらが古代国家の基礎を作るとともに、後世の日本に大きな影響を与えたのである。

る。まさに「元祖・オンリーワン」だ。

だがその一方で、「太子の業績は後世になって創作されたものだ」とか「聖徳太子は実在しなかった」といった説がよく取り上げられる。その影響からか、最近の学校の教科書では「聖徳太子」ではなく、「厩戸王（聖徳太子）」という記述がほとんどだ。

しかし駒澤大学名誉教授の石井公成氏によれば「厩戸王」という呼び方は、どの時代の文献にも全く見えない」（『聖徳太子 実像と伝説の間』春秋社）という。とすれば、そもそも教科書の記述の仕方は不適切ではないだろうか。

確かに日本書紀の記述などには誇張や脚色があることは否定できないし、推古天皇や蘇我馬子と共同で行った政策も多かったと思われる。しかしそれを以て「聖徳太子」を否定してしまうのは無理があるというのが率直な感想だ。

この議論は別の機会に譲るとして、角度を変えて「歴史に学ぶ」という観点に立てば、太子の業績は現代の企業経営にも通じる点が多い。

例えば、①地政学リスクに対応するには的確な情勢分析と戦略が重要②自社の強みを明確にして力をつける③徹底的にオンリーワンを追求する――など、多くの示唆を得ることができる。

岡田晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策——その光と影』（PHP新書）。